

〔雑録〕

顕著な植物の分布とその群落 2
〔新潟県五泉市菅名岳〕

石 沢 進

菅名岳の天然林の特徴的なものとしては、すぐれたカツラ林とブナ林がある。(菅名岳の位置は、412ページの地図参照)

〔1〕 〔カツラ林〕

カツラは日本と中国(変種)に分布する古い型の残存植物で、日本では北海道、本州、四国、九州にその生育が知られている。県内では、海岸近くの低海拔地には少なく、やや内陸に偏って分布し、離島の佐渡ヶ島にもみられる(本分布図集第6集:115ページ, No.476)。カツラは巨木になり、天然記念物に指定されているものもあるが 県内でも南魚沼郡六日町岩崎万松寺の「岩崎の大カツラ」は目通り周囲10.9m、高さ40mで県の文化財に指定されている(新潟県教育委員会(昭和46年):新潟県の文化財 297ページ)。

かつては深山の沢沿いには、カツラの大木が多く、鬱蒼とした樹林も多かったが、現在ではカツラの大木の群生は、県内では殆どなくなってしまった。そのような中に、菅名岳の人里近く、海拔の低い山麓の沢沿いには、現在でも見事なカツラの樹林が残されていて、大木が数多く見られ、胸高直径単幹で184cm、岐幹のもとで250cmのものを含む。樹高は30mを越し、樹冠が大きくひろがって、樹林の上層を覆っている。林内は亜高木および低木層を欠いて明るく、林床にウリノキ、ミヤマイラクサ、ウワバミソウ、アカソ、コチャルメルソウ、サワハコベ、スミレサイシン、シラネサンキュウ、キバナアキギリ、イワガネゼンマイ、オシダなど、やや多湿のところに生育する植物が繁茂している。川沿いの上、斜面の中腹からも湧水があるので、林内は空中湿度がつねに高く、樹幹の高所までイワオモダカ、オシタクジデンド、ホテイシダなどの着生植物が生育している。中でも、イワオモダカは稀産のシダで、県内では佐渡ヶ島と岩船郡朝日村高根に知られているだけである。菅名岳ではカツラの他、ブナ、トチノキ、アカイタヤなどの高木にも豊富に着生しており、地上数メートルの幹上に大きく団集(簇生)する生態は特異である。県内随一の多産地であり、生育状況は良好である。広域にわたる天然林の温存により、空中湿度が高く、良好な生育環境が保たれているからである。

また、この樹林の林床にはイワヤシダ、オニヒカゲワラビ、オオヒメワラビなど暖温帯の県内稀産のシダ植物も見られ、特にイワヤシダは県南西部の黒姫山、中蒲原郡村松町滝谷、東蒲原郡三川村、岩船郡神林村(牧野恭次採集)などに分布が確認されているだけである。菅名岳ではカツラ林とブナ林の接する谷あいには群生している。このすぐれたカツラ林は、学術のみならず、営林並びに景観の上からも是非とも保存すべき天然林である。

〔2〕 〔ブナ林〕

菅名岳のブナ林はおおよそ3つの型に区分できる。即ち、沢すじの混交ブナ林、中腹の代表的なブナユキツバキ亜群集、そして山頂付近のブナ低木群落である。

1. 沢すじの混交ブナ林

沢沿いではブナの密度は低く、トチノキ、カツラ、サワグルミ、アカイタヤ、ミズナラなどの落葉樹種が混生する。立地の環境条件によって混生する樹種が異なり、ブナ樹林の成立や立地の環境条件などの解明の上で重要である。

2. 中腹の代表的なブナユキツバキ亜群集

新潟県内の森林の中でも、ブナとユキツバキで構成される林は、最も代表的な樹林の一つであり、ブナユキツバキ亜群集にあたる(山崎 1968)。この亜群集は、日本海側の典型的な森林形態であり、菅名岳中腹の林相はその典型的なものである。その垂直分布の幅は広く、ブナとユキツバキを主木に、ほとんど他の樹種を混えないすぐれた景観を保持している所が多い。

このような林相のブナ樹林で、人里に近い位置にあるものは近年ほとんど消滅したが、ここ菅名岳は人里近くにあつて、なおよく自然の状態が保たれており、「県の木」として親しまれているユキツバキの自然の実態をも身近かにみることができる。

3. 山頂付近のブナ低木群落

ブナは本来高木に生長するが、新潟県の多雪地で、風衝の斜面や山頂付近では、低木の形で密集群落をなすことが多い。このようなブナ林は、また、雪国の新潟を象徴する一つの群落形態である。菅名岳の中腹以上から山頂にかけてみられるが、海拔の上昇に伴ない、樹高が次第に小さくなって樹形は連続的に推移する。ブナの雪国における一つの生態として興味深い存在である。狭い地域内で、ブナの高木群落が低木群落へと、明白に移行することを

手近にみることの出来る所は稀であり、その点からも菅名岳のブナ林は、学術上極めて貴重な存在である。

4. 暖温帯林の構成種や県内稀産種の生育

菅名岳のブナ林では、南方系の植物の分布、県内稀産の植物の生育が目立つ。

(暖温帯林の構成種)

新潟県では、ブナが比較的低温所にも分布していて、しばしば南方系の植物が共存する。菅名岳の山麓部には、ウラジロガシ、アカガシ、ムラサキマユミ、ヒサカキ、ムラサキニガナ、ヤマホロシ、ヤマヤブソテツ、オニヒカゲワラビ、イワオモダカなど暖温帯林の顕著な構成種が生育しており、分布上貴重な存在となっている。

(県内稀産種)

林下の暖地性植物の中で、とくにムラサキマユミ、ヤマホロシ、イワオモダカ、イワヤシダなどは県内稀産である。

ムラサキマユミは県南西部では点々と分布しているが、中・北部では稀であり、南蒲原郡下田村、東蒲原郡三川村谷沢カタガリ山、新発田市などと少ない。菅名岳ではブナ林内に点在している。

ヤマホロシも県南西部に分布しているが少なく、とくに中・北部では稀で、弥彦山系、佐渡ヶ島および内陸の奥胎内に分布しているだけである。菅名岳では、谷間のブナ林のすそ、サワグルミに接するやや開けた向陽の斜面に僅かに生育している。

イワオモダカは上記のように県内ではいずれも稀産の種であり、菅名岳ではブナの高木に多く着生している。

以上、狭い地域にブナの純林、低木林、混交林にあわせて、他でも残り少ないカツラ林のある菅名岳は、手近かにあって日本海側におけるブナならびにカツラの、樹林形成の複雑な条件を知る上で至便であり、また、低海拔地におけるブナと暖温帯の植物との共存もみることができて、極めて貴重な地域である。すなわち、この山のブナ林の存在は、日本海側の多雪に対するブナの生態の多様な面を、狭い地域内に濃密に表現している、いわば「日本海側ブナ林の縮図」である。

カツラは沢すじの樹木であるが、とりまくブナ林を失えば、生態環境の遷移を招来して消滅する。保護にはブナとカツラは一つにまとめて、万全の対策を講じることが必要である。ちなみに、この地域には岩礫地が多く、森林の伐採は崖崩れを誘発するおそれもあり、治山の上からも菅名岳のブナ林は全面的の保全が大切である。また、このようなすぐれた自然の保たれているところを失うことは、学術上のみならず、営林研究の面でも大きな損失である。低海拔地に残されたブナ林の貴重な参考林として、低海拔の沢すじから山頂にかけての広範囲に、そのすぐれた自然を保全することが必要がある。

菅名岳のブナ林は、学術ならびに営林の参考林として、さらにまた、動物界の保全、治水をはじめ、「やすらぎの森」としてこれを保護する意義は大きい。これを後世に残し伝える責任は重く、その対策は今日の急務である。

(文献)

Yamazaki, T. (1968) Vegetation of snow camellia "Camellia of Japan" (ed. T. Tuyama): 23-26 Takeda Science Foundation, Osaka

菅名岳 ブナ林の植生

調査：〔石沢 進・笹原 治〕

1986.10.7

(地形) 斜面

(日当) 陽

(海拔) 590m (方位) 西 (傾斜) 25° (面積) 10×20m²

(階層) (優先種) (高さm) (植被率%) (胸径cm)

I 高木層	ブナ	10~20	80	73.40
III 低木層	オオバクロモジ	1~3	20	
	ユキツバキ	0.5~1	70	
IV 草本層	ホソバカンスゲ		20	

高木層：ブナ(4・4), ツルアジサイ
 低木層：オオバクロモジ(1・2), ムラサキヤシオツツジ(1・1), ユキグニミツバツツジ(1・1), ムシカリ(1・1), ホツツジ, マルバマンサク, リョウブ, ウワミズザクラ, コハウチワカエデ, ヤマウルシ, ユキツバキ(3・4), エゾユズリハ(1・2), ヒメアオキ, アクシバ, コシアブラ, ヒメモチ
 草本層：ホソバカンスゲ(2・3), シシガシラ(1・2), ミヤマウズラ, ヤブコウジ, イワガラミ, ヤマウルシ, アカイタヤ, ブナ, ミズナラ, チシマザサ